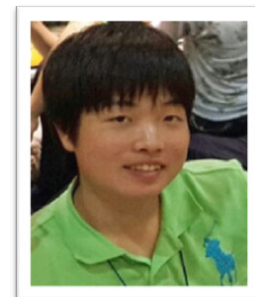


第22回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ⑨

「真の国際交流」



森田 大雅

北海道札幌西高等学校 2年

現地同年代との楽しい交流や、施設見学で終わってしまう、お飾り的な国際交流募集を、校内掲示で目にするのがあった。

そのなかで、日韓高校生交流キャンプは、同年代の高校生と事業計画を立て発表するという目的のもと、運営されていると知った。言葉や育った環境、考え方の違いを越え、理解し協力して成し遂げるといふ『真の国際交流』が魅力で参加を決めた。

また、世界一だとも言われる高校生の履修教科の数、高い英語力の身につけ方や、実際の状況を聞き、近い将来へ刺激を受けたいとも思った。欲を言えば、等身大の日本の高校生を知って貰えたらと、密かな目標も立てていた。

キャンプ中は、一瞬一瞬が深く強く心に残るものであった。想像以上に勉強熱心で、将来への選択が、世界に向けられていた。私にとっては、世界は遠くに感じるが、韓国の高校生に0にとっては、選択のひとつに

過ぎない感覚である様を感じ取れた。日本には、そのような考えや、土壌（風土）がまだまだ薄いのだとも思えた。お手本にすべき点である。

相手が発する言葉を、言語として聞くのではなく、心で深くとらえたい。つまり話を聞くことだ。それが出来たならば、私の言葉や気持ちも相手に届くことを、このキャンプで強く深く実感した。

隣人とのコミュニケーションの延長に、隣国との交流がある。特別なことではなく、積み重ねた先に、言語、人種や宗教、信条を超えた真の国際化があるのだと考えることが出来た5日間であった。

いつか世界のどこかで、今回のメンバーとキャンプ中の様に、何かをつくりあげる…そんな仕事が出来たらと、私の新たな目標となった。

「第22回日韓高校生交流キャンプを終えて」



具 藝書(ク・イエソ)
仁憲高等学校 2年

予定されていたボランティア活動の日程を延ばして、キャンプの事前説明会に参加した。私は希望通りに IT チームに配属され、明るいイェジ・メンターがリードしてくれる話し合いの中、チームメイトたちとすぐに仲良くなることができた。その場でチームメイトたちと連絡先を交換し、SNS のグループチャットルームも開設した。そんなふうに私たちはキャンプが始まる前から、すっかり仲良くなっていた。その日から私はキャンプの日を指折り数えて待っていた。

前日までの土砂降りも必然であるかのようになり、胸を躍らせながらキャンプ初日を迎えた。会場のハイソウルユースホテルに到着し、日本の参加者を待ちながら韓国の参加者たちと挨拶を交わしたり、日本語の歓迎の挨拶を勉強したりした。緊張のせいか覚えては忘れてしまう日本語の挨拶を手のひらに書き込み、「ヨウコソ、カンコクニ」と何回繰り返して呟いたことか。

自己紹介の後、ぎこちない初対面の席でシュンキとユウシが準備してきたものがあると、自ら立ち上がった。「サランへ(愛してるよ)」とユウシが言うと、シュンキが面

白可らしい顔で「シムクン(胸キュン)！」と返す演技を見て、みんなで大笑いしてしまった。それからは、うちのチームのテーブルからはぎこちなさや緊張感はすっかり消え去り、期待とワクワク感でいっぱいになった。

話したいことが山ほどあるのに言葉が通じないというもどかしさと、これからの5日間に対する期待感、それからこの10人のチームメイトで作っていく事業アイテムに対する好奇心など色々な感情が絡み合ったキャンプの初日は、あっという間に終わっていった。

二日目、暑いけど爽やかな夏の天気で、気持ちよく一日をスタートした。ITチームのチーム4とチーム8と一緒に「サムスン・イノベーション・ミュージアム」を訪れた。シミュレーションゲームやメイクアップ体験を直接体験してみたり、パソコンの本体程の大きさだった記憶装置が顕微鏡を使わないと見えない程小さいチップになっていく過程を目にしたりした。またこれから IT 技術の発展で変わっていく私たちの未来の生活を垣間見ることができた。小さい頃想

像していたあらゆるところがパソコンでつながっていて簡単に操作できるユビキタスが実現する日がそう遠くないような気がした。「サムスン・イノベーション・ミュージアム」で私たちは事業アイテムに関する様々なアイデアを得た。

夕食の後は、「ゴールデンベル」というクイズ大会があった。私は日本側参加者のハヤトとペアになった。必死に問題に答えようと一緒に頑張った私たちは、1週間が過ぎた今でも連絡を取り合いながら、日本について、また韓国について話し合っている。思った以上に似ているところが多く、知っていた以上に異なることも多かった。

三日目は、事業アイテムを決める作業に没頭した。アイデア会議を何回も開き、溢れる程多かった意見をまとめて、お年寄りや体の不自由な方々をターゲットとする「4D シミュレーション・エンターテインメント」という事業アイテムを決めた。事業ブースを作ったり、実現可能性と採算性をアピールするための数値中心の資料を作成したり、事業の模型を作ったり、難しい内容を覚えるために繰り返し練習をしたり、遅い時間までみんなで集まって模擬質疑応答をしたりしていた記憶が鮮明に残っている。

翌朝、クタクタに疲れていたにもかかわらず、それも忘れて、みんなチームの事業アイテムに対する愛着と情熱で緊張感あふれる雰囲気の中、事業ブース体験のリハーサルを開始した。

あっという間に模擬投資会が終わった。チームのみんなでやり遂げたという達成感でいっぱいになりつつも、あの時、こんなふうに説明をすればよかったという心残りもあった。受賞には至らなかったものの、投資者40名の中、36名から投資金を誘致することができたし、うちのチームの事業アイテムに好感を持って多額の資金を投じてくださった方もいた。何よりチームのみんなですべて最後まで最善を尽くすことができたのが嬉しかった。あの日、私たちは最優秀賞よりもずっと価値のある賞をもらったと思う。

修了式の後、特技披露と両国伝統遊びの時間があった。私とキョンボムは日本のけん玉にはまってしまい、明け方までシュンキにやり方を教えてもらいながら遊んだ。最後の夜が更けてきた。私たちは部屋に集まり、疲れなどものともせず、ゲームをしたり、プルダクボクン麺を食べたり、おしゃべりに夢中になったりして過ごした。また、私はたどたどしい日本語で「真実ゲーム」の通訳をしたり、恋愛話をしたりしていると、時間が矢のように過ぎていった。

最後の日は、日本語の実力など問題にもならなかった。言葉じゃなくても話は通じるということを感じた。手の動き一つで何が言いたいかが分かってしまうのだから。たくさんの会話を交わしたわけでもないのに、深まってしまった絆のせいかな、みんなとの別れが本当にツラかった。“最後だから、泣かないで笑いながら別れよう！”とタカユキが言い、今にも零れ落ちそうな

涙を耐え続けた。別れが惜しくて、何度も再会を約束し、連絡を取り合おうと約束を交わした。中が見えない空港行きのバスの窓に向かって、もしかしたら日本のみんなも私たちを見ているかもしれないと、必死に手を振り続けた。

長くて短かった五日間。深い友情を分かち合った仲間たちと必ずまた会うことを誓いながら、私は今回のキャンプを絶対に忘れることはできないと思う。

「絶対行くべきキャンプ」



加松 祐記

早稲田大学高等学院 2年

僕がこのキャンプに応募した理由は、単純に韓国の経済や同世代に触れたかったからだ。自分の通う学院にも韓国からの留学生が学びに来ることはあるが、五日間寝食を共にして共通の目的のために知恵を出し合う、そんな親密な体験を韓国の学生とする機会はないだろうと思い応募した。

まず初めに、このキャンプではいかに新しいビジネスを構築するのが難しいか痛感させられた。自分たちのカテゴリーは「IT」。一見多方面に応用できそうで簡単だとは思ったが、調べて考えて行けば行くほど飽和市場であるように見えてきた。模擬投資の評価項目にも記されていたビジネスで重要な斬新さが浮かばず、両国の学生が案

を出しても既存のビジネスであると指摘され計画はなかなか進まなかった。また、いざ案が出てきても、それをビジネスとして展開し、利潤を出すためのファンダメンタルは一見容易に見えて複雑なものであると学んだ。

次に、現場体験での見学や同じルームの人たちとの話を通して、韓国企業の強さを実感した。日本の企業が業績低迷にあえぎ、本社売却などと取りざたされているなか、たった一社でシリコンバレーのようにビル群を擁しコングロマリット化するサムスは印象的だった。

また、ルームの人と話していると、その圧倒的な勉強量に驚愕した。日本の学生が

塾を終え帰宅している時間にやっと韓国では学校が終わり、塾に行く。そんなことを聞いて自分も勉強をしなければという焦燥感が沸いた。しかしそれと同時に、その圧倒的な勉強量が韓国企業の強さにもつながっているのだと思った。そう思い、余計勉強しなければと思った。

そして最後に、同世代の韓国の学生と話をし、結局は国籍を問わず同じようなことを悩むのだと思った。最後の夜に話した韓国の友人は、自分の将来が見えない、勉強を沢山しているけど報われるか不安だ。そういったことを話していた。自分も同じようなことを悩んでいたため、大変共感した。しかし、最後は時間がなく、結論を出すことはできなかった。しかし、僕にとっても、その友人にとっても本当に有意義な話ができたとと思う。

また、他の友人とはなぜか将来は負けな

いと切磋琢磨しあうライバルとなった。きっと、ここで出会った友人たちは一生の友人になると思う。また、良いライバルができたと思う。

僕はこのキャンプで、将来海外で勝負をしたいと強く思えるようになった。また、韓国の友人を見て、努力をしたと自分が思える水準が格段に上がった。そして、いつか両国で協力してビジネスをしたいとも思った。

こんなにも貴重なプログラムを企画していただいた皆様、メンターとして意思疎通を円滑にしてくださり、時に面白いことをしてくださったキム・ヒジンさん、そしてメンバーのみなさん、本当にありがとうございました。



「違いがあるから面白い！日韓混成チームでの忘れられない五日間」



齋藤 若葉
関東国際高校学校 2年

拍手と歓声！会場のハイソウル・ユースホステルについて私達日本グループを待っていたのは、情熱的で温かい韓国グループからの Welcome でした。それでこれからの五日間に対する不安が一気に吹き飛びました。

実は私は事前説明会に参加し、周りの優秀な日本人高校生と話が合うのか、外国人とのルームシェアは果たしてうまくいくのか、魅力的な新ビジネス案をチーム毎に企画し賛同してくれる投資家に投資してもらうなんてハイレベルな課題を自分が達成できるのか、正直とても不安だったのです。

私達チームは、飲食サービスのビジネス案作成のカテゴリーに属していました。まず、最初のアクティビティとして各自が自身の事業アイテム構想をチームメンバーと共有します。

日本を出国する前は、私は声の大きい人や外国語が上手な人、また韓国の学生ははっきり意見を言うことに慣れているから彼らの意見が最優先されるのではないかと思っていました。ところが実際には出身国に

関わらずチーム全員が他の人のアイデアを尊重し、一人のアイデアも削られることはなく、全員のアイデアが詰まった韓国・日本・インターナショナルな一汁三菜の健康志向のメニューを提供する多店舗型レストランを経営する方向に決まりました。

新聞では両国の対話がうまくいっていない記事が多く掲載されていますが、私達高校生には当てはまりませんでした。同じ東アジアに属し隣の国同士であるのに、程よく言語が異なり、意思疎通がきちないところがかえってお互い他者の話を聞くよう努力し、やがてお互いの気持ちが理解できたときの喜びを大きくしてくれました。

現場体験や市場調査後は、事業案を確定し連日事業ブース作り、パンフレット作成、投資家へのプレゼン準備です。いわゆる缶詰状態で、外が晴れなのか雨なのかそんなことも一切気にせず、集中して一つの目標に向かっていました。部屋に戻るのは毎晩遅く、私は韓国人二名のルームメイトと一緒に、初めての外国人のルームメイトと

本当は少しでもゆっくりプライベートなお話しをしたかったのですが、皆、眠気に勝てませんでした。

私達のレストランは、健康志向のメニューを、急ぎのお客様にはドライブスルーで、ゆっくり楽しみたいお客様にはカフェスタイルで提供します。お客様は食した料理について成分・カロリー等の情報を電子的に保管することにより健康管理に役立てることができます。レストランからはお客様が目標（例：体重を減らしたい）に近づくにつれて、キャラクターが太めからスリムに変更する等の可愛い割引情報発信をします。

さて、いよいよ模擬投資本番の日、投資家の皆様に、まずはブースに立ち寄っていただかなくてはなりません。人当たりが良い人が呼び込みし、文書作成能力がある人が要点良くパンフレットをまとめ、計算が得意な人が正確に決算概要を作成し、理論的に話ができる人がプレゼンをし、反射神経の良い人が投資家の鋭い質問に上手に受け答えをする、各自が適材適所で頑張り、しかも抜群のチームワークでした。

最後に投資家の人に契約書に投資金額とサインをしていただいた時は、一人では達成できない事でもチームでなら達成できる、その素晴らしさを体験することができました。しかもチームは日韓混成です。最終

的に私達のチームは優秀賞をいただき、とても嬉しい結果となりました。

Finale Festival では、両国から才能ある人が舞台に登場し、皆明日別れる辛さを忘れるよう盛り上がりました。チームでゲームをしたり話をしました。この日の皆との思い出は帰国した今でも懐かしく、巻き戻したい瞬間です、一生忘れません。

四泊五日という短い時間でしたが、韓国の友人日本の友人と過ごした密度の濃い時間は私の宝物です。言葉や生活環境が違っているからかえって面白い、異なる長所を持ち合わせたメンバーが協力してチームで困難を乗り越えて達成することの充実感を体験することができました。

私の将来にもいつか今回のような挑戦が待っているのかもしれませんが。今回の体験を生かし、何かをやるかやらないか迷ったとき、チームの力を信じ、やる方を選択し社会の役に立ちたいと思います。

最後にこの素晴らしい交流キャンプを資金的にサポートくださった主催者の皆様、実際の企画・運営をしてくださったスタッフの皆様、理解不能だったかもしれない言動・行動をとる私達高校生に四泊五日も辛抱強く付き合ってくださったダヒさんをはじめメンターの皆様、本当にありがとうございました。